



ダン・タイ・ソンもマイスキーも 世界がうなる廉太郎ホール

佐藤寛敬

Bernard Rosenberg

自然に満ちた竹田市、そして廉太郎ホール

公演当日の朝、美しい朝日が久住の草原から昇るところに遭遇し、その光景には本当に感動を覚えました。今も胸に焼き付いています。この大地のエネルギー、自然から得られるインスピレーションは、演奏にのぞむにあたって大きなパワーとなりました。そして、廉太郎ホールは木造りの自然に溢れる雰囲気がとても温かく印象的でした。人工的なきらびやかさとは違った、自然に満ちた空気は私の音楽と感覚にとっても合っていて、音の響きも自然で演奏しやすかったです。大分竹田という、大都市でない自然豊かなところで、そこに暮らす皆さんの温かい雰囲気とともに、音楽への集中力を感じましたし、とても自然なコミュニケーションができて嬉しく思いました。また、ロビーでは、ベトナムのマルシェを開催して下さるなど、心温まるもてなしのお気持ちもステージにも届いてきました。廉太郎ホール、そして久住での滞在は、これまでにない大きな自然のエネルギーに包まれた体験でした。(ダン・タイ・ソン談)



ソンさん(右)とスタッフ鈴木(左)

廉太郎ホールにダン・タイ・ソンがやってきた!

木がふんだんに使われている館内を珍しそうにキョロキョロ見渡し「Ecology」とつぶやくソンさん。本番前の舞台袖で、スッと顔を上げ、ゆっくりと舞台に向かうソンさん。演奏の余韻を漂わせて静かに舞台袖に帰ってくるソンさん。楽屋ではお茶目な笑顔にも出会えました。ふっと自分の世界に入る瞬間、目をつぶって集中する様子、ソンさんの自然体、自分を主張しない穏やかさ、凛とした神々しさを感じながら1日を過ごしました。最後のお見送りの時「一緒に撮ろうよ」と、写真を1枚。ソンさんのこの笑顔! 竹田との確かな「絆」を感じました。(鈴木陽介記)

コラム

ホールの特等席は3階にあり!

廉太郎ホールの“音の響き”、真骨頂は3階席にあります。開館前にアンサンブルの生の演奏を視聴した際、音響設計関係者、建築関係者、制作チームで、客席のあらゆる場所での音の響きを検証したところ、3階席の響きは抜群によかった、これは誰の耳にも明らかな違いでした。

伊熊よし子さんコメント



マイスキー、ダン・タイ・ソンとも、1階と3階の両方聴きましたが、やはり3階の音響は最高で、やわらかく弧を描いたように楽器の音がふわりと響いてきて、あまりの美しさに眠ってしまいそうになりました。廉太郎ホールの音の響きの良さは、どこで聴いても秀逸ですが、純粋に“音”を楽しむなら絶対に3階席をお勧めしたい!(音楽評論家・伊熊よし子)

穴場な3階で川島を聴いてみよう!

廉太郎ホールの最大の特徴である“ナマ音の響き”、もし、お友だちと鑑賞する機会があれば、一部と二部で1階席と3階席を交換して“音の違い”を楽しむのも一興です。



3階からでも意外と近く舞台が見えます。

グランツつけた廉太郎企画

三善晃 × 近藤良平

瀧廉太郎“日本の四季”を歌う!踊ろ!

竹田市ゆかりの瀧廉太郎にちなみ、プロのアーティストと市民が創り上げる、市民参加の企画です。昨年度は仙台フィルハーモニー管弦楽団とともに、合唱曲「群青」、「荒城の月」(編曲委嘱初演)と、ミュージカル「橋を架けよう!」に250名の市民が参加し、大きな反響と市民参加のムーブメントを生み出しました。今年度は三善晃(作曲)と近藤良平(ダンス)のコラボで廉太郎作品を「歌って」「踊り」ます!

誰でも参加
できます!
詳しくは6ページ
(裏表紙)

コンドルズとは?

近藤良平を主宰とした、男性のみ学ラン姿でダンス、生演奏、人形劇、映像、コントを展開するダンス集団。世界30ヶ国以上で公演。ニューヨークタイムズ紙絶賛。NHK総合「サラリーマンNEO」内「テレビサラリーマン体操」、NHK連続テレビ小説「てっぱん」オープニング 振付出演。

「コンドルズの
メンバーが
ダンスの
プロです」



何でも振付けちゃう?!

NHK連続テレビ小説「てっぱん」では、葉加瀬太郎のヴァイオリンにのせて、“お好み焼きが出来上がるまで”を振付け、テレビサラリーマン体操では、サラリーマンの土下座シーンさえダンスにしてしまう、彼に振付けられないものはない?!

誰とでもコラボ?!

今年で9年目を迎える埼玉の障害者ダンスチーム「ハンドルズ」。障害の有無は障害ではないと、楽しいダンスを披露し、年々パワーアップしている。こんなにもユーモラスな取り組みをしてきたダンスカンパニーがあるだろうか?



CHARU

超個性的なメンバーたち

ダンサーに隠された真の姿(?)は、ロックバンドのボーカル、文学博士、油画・映像作家、外資系企業の代表取締役、元ローラーホッケー日本代表監督、バーのマスター、書道家・茶道師範などなど、それぞれタダモノではない異業種ダンス集団だ。

近藤良平さんとコンドルズ



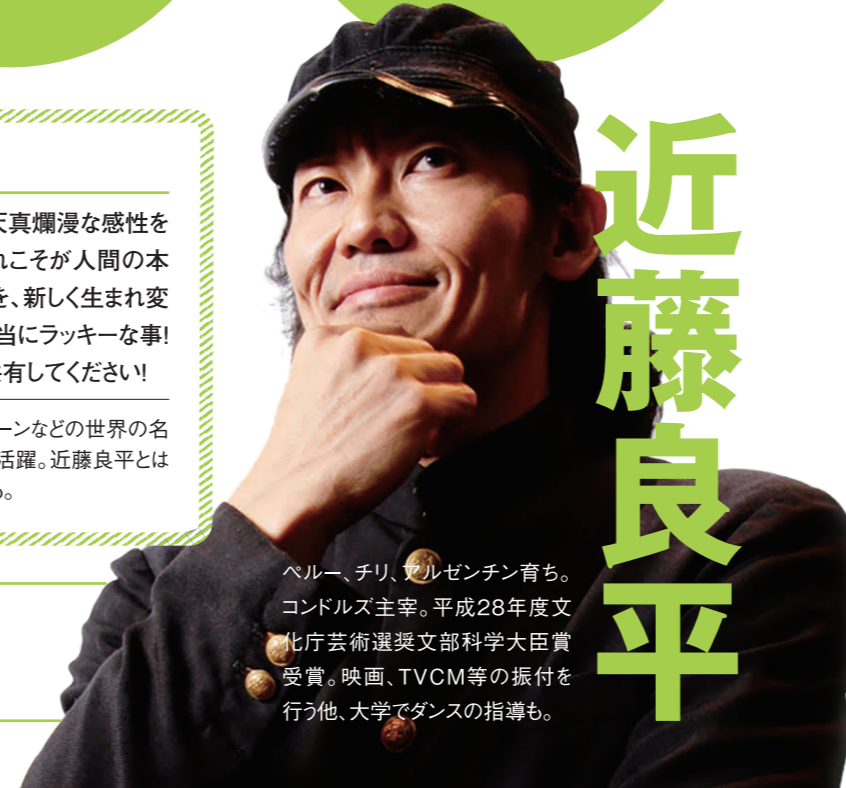
首藤廉之
(舞踊家/大分市出身)

皆身体は大きいけれど、子供のような純粋さ、天真爛漫な感性を持った集団!良平さんの動きを体感すると、これこそが人間の本质であり本能だといつも感じます。そんな空気を、新しく生まれ変わった竹田の劇場に運んでくださるのは本当にラッキーな事!是非みなさんもこの素晴らしい時間を劇場で共有してください!

モーリス・ベジャール、ジョン・ノイマイヤー、マシュー・ボーンなどの世界の名だたる振付家に高く評価される。近年は俳優としても活躍。近藤良平とは俳優として共演するほか、近藤の振り付けで踊ることも。

公演概要

2020年2月2日(日)13:30開場 14:00開演
11/16(土) 10:00~チケット発売!



近藤良平

ヘルム、チリ、ザルゼンチン育ち。コンドルズ主宰。平成28年度文化庁芸術選奨文部科学大臣賞受賞。映画、TVCM等の振付を行う他、大学でダンスの指導も。



CHARU



CHARU



CHARU

スタッフ鈴木が涙した!

近藤良平が初めてナマの合唱曲「日本の四季」とコラボする!

近藤良平の魅力は、なんといっても縦横無尽にステージを飛び回る圧倒的なダンス。はたまた誰もが参加し、体を動かすこと、音に乗る楽しさも教えてくれる。そして、人形劇やコントでは、あまりに馬鹿馬鹿しいことを、大人の人が“真剣に”やってくれる。カッコよさと優しさ、異様なありさま、そのギャップがやがて感動へと姿を変える…。今回、近藤が振付けるのは瀧廉太郎作/三善晃編曲「日本の四季」から「荒城の月」、「雀」、「雪」、「お正月」、「春」、「花」の6曲。それを歌うのも市民なら、踊るのも市民。小学生から99歳まで(!?)が参加する予測不能のパフォーマンスだ。いまだかつて、誰も見たこともない、歌の力、ダンスの力がせめぎ合う、合唱と近藤良平の初コラボレーションが待ち遠しい。



スタッフ 鈴木

三善晃

「日本の四季」ってこんな曲!

「日本の四季」は21年前の「国民文化祭おおいだ'98」の《合唱の祭典》のために三善晃が編曲した作品です。大分県ゆかりの瀧廉太郎の作品が春夏秋冬と四季のメドレーの形に構成されており、演奏するためには童声合唱と混声合唱と2つの合唱団、そしてピアノが2台必要という、合唱曲としてはかなり規模の大きな作品となっています。三善晃のサウンドをまとった瀧廉太郎の四季折々のうた。新たな音楽の地平を切り拓いた2人の作曲家による協働作品を、市民とともに令和の現在に歌い継いでいきます。

三善晃(みよし あきら・1933~2013)

作曲家。東京大学文学部仏文科卒。芸術選奨文部大臣賞はじめ日本芸術院賞、モービル音楽賞、フランス政府から芸術文化勲章オフィシエ賞を受けるなど国内、海外を問わず受賞多数。「三善晃ピアノコンクール」などの審査委員長なども務め、ピアノ教育に没年まで取り組んだ。壮年期からは合唱に力を入れ秀作を残している。



合唱指揮者
菊ちゃん先生

2020年の廉太郎企画は合唱のオリンピック「コロ・フェスタ」

国内外から20-30の合唱団が集い、交流を深め、演奏を披露しよう合唱のビッグ・イベント、それがコロ・フェスタです。メインコンサートはもちろんのこと、街角コンサートや公開リハーサル、前夜祭で竹田の街中が歌声に包まれます。既成の合唱団のほか、誰でも“グランツ合唱団”として、廉太郎ホールで歌えるチャンスが訪れる!まさに合唱のお祭り、「コロ・フェスタ2020 in たけた」にご期待ください!

“歌い続け、聴き合い続け、一滴の汗と涙を千万のほお笑みに吹き飛ばし、明日へ向かってみんなで肩組んでゆく励まし合いの勇気こそ、コロ・フェスタの存在理由であり、勲章でもあるだろう” (コロ・フェスタ スーパーバイザー 三善晃のメッセージより)

